体 育 学 研 究

第 8 卷 第 3, 4 號

昭和 40 年 2 月

S. ASAI: Eine Betrachtung über den Ursprung
der Kultur in der Leibeserziehung

体育における文化の根源について

奈良女子大学 浅 井 浅 一

I

文化の最も原初的な形態は、原始民族にみることである。ヴォイレ (K. Weule) は「スポーツの民族学」の論文にそれを示した。

ミツチエル (Mitchell, A. M.) は、これらの遊戯、スポーツの発生には、自然環境、伝統、社会的要求の三つの条件をあげているが、われわれは、この発生が生活領域によつてもちがっていることを同時に認めていかなければならない。たとえば、武技は戦闘に、釣りは狩猟に、舞踊は祭礼に、娯楽は余暇に発生しており、釣りは戦闘のために発生したものでないからである。もちろん、発生後は、狩猟技術が戦闘に、戦闘技術が狩猟に応用されたことはいうまでもない。次に、発生した遊戯、スポーツは、人間精神の変化にしたがつて文化として発達した。たとえば、「釣り」は古くから漁師にとつて生活の一部であり、獲物はその目的であつた、当時の人が直接問題にしたのは労働の結果であつて、釣りの楽しみや成功のよろこびではなかつた。もちろん

かれらにも成功のよろこびはあつたであろうが、それは、現在のそれとは質的にちがつたものである。またかれらは、満足するためには手段をえらばなかつた。したがつて獲物の死について考慮はしていない。けれども、文化が進んできた今日では、相手を死にいたらしめる方法はスポーツの精神に矛盾する。殺戮を直接の目的とするような狩猟家に対して現在は、もはや文化人としての資格も権利も認めてはいない。

現代の狩猟は、むしろ、自然や動物を愛護するところに精神がある。ドイツの狩猟家、バルチュ (R. H. Bartsch)、の「ドイツの狩猟家がいなかつたら、ドイツの動物は絶滅していたにちがいない。それを保存したのは、狩猟家の力であつた。狩猟家にとつて、動物は射殺するためのものでなく、それを繁栄させ、観察し、保存するためのものである。」¹⁾ といった思想は、英、米、その他の人たちにも影響し、心なき狩猟家が自然を荒らすことに鋭い批判を与える動機となつた。

しかしながら、原始民族では、身体運動はいまだ生活とともに存在し、その根源は、個人および種族の生命保全にあつた。

II

文化生活は目的をもつて営む生活であるというならば、全ての生活に目的をもったギリシヤ人が人類最初の文化人であろう。現代の文化は、このギリシヤの文化の復活を基礎に発展しており、体育もまたその例にもれるものではない。それでは、現代の文化の根源をなすものは何んであろうか。

表現体操 (Ausdrucksgymnastik)⁴⁾ の創始者ボーデ、R. Bode, は、文化の根源は「生命的なもの」(Lebendige) にあり、身体運動の過程においては律動 (Rhythmus) によつて認識できると考えた。それは、かれの「体育における生命的なもの」⁵⁾ に最もよく現われている。

かれは、文化の退行を人間の「本能的な力」の消失にあるという。それでは、かれのいう本能的な力とは何か。それは、積極的に説明することはできないが、人間の最も深いところに隠されて存在する「あるもの」であり、「人間の中心的な力」として感じていくことのできるものである。この力は人間の文化的精神と結びつき、それ以前から人間に内在しつづけてきたものである。

この本能的な力が人間から消失するとき、同時に高度の精神力を失い、文化もそれによつて墮落することになる。ボーデは、この本能を「生命保全への衝動」と名づけている。この衝動は、胎児の臍の緒にたとえられ、胎児が臍の緒によつて母体から栄養をとるように、人間は衝動によつて自然の「大地からのリズム」(Erd rhythmus) を感じていくことができる。

ボーデによれば、この衝動の消失による文化の墮落は内に対立するものをもたなくなることによつておこる。人間の内部に戦うもの

が存在しなくなれば、文化はもはや発展しないという。文化の発展に例をみれば、つねに対立するものをもつて進歩している。

ゲーテは自然概念によつて、教会の独断と戦い、それを排して人間に生命を発見し、人間の活動力の根源は情意 (Seele) にありとし、それは合理的知性によつて表現されるものと考えた。これは、知識による世界観の勝利であつた。これに対して、新しく挑戦したのは心理学であつた。ボーデもまた心理学者クラゲス (L. Klages) の思想⁶⁾ によつて生命と意識の対立を問題とした。

この生命と意識の対立は、ボーデによつて新しく登場させられた問題でない。すでに、人間のパラダイスにおいて、「生命の木」(Baum des Lebens) と「知識の木」(Baum des Wissens) とは対立したものであつた。

しかし、現代では、この二つの木の区別が不明になり、「概念混乱の木」(Baum der Begriffsverwerrung) が生じて来ているとして、この二つの概念を明確にする目的から、ボーデは、生命と意識の関係を問題としたのである。

かれにしたがえば、人間の意識活動を一つの流れにたとえることは誤まりであり、意識作用は流れでなく、むしろ流れを止める作用である。流れは自然過程にしか存在しないのである。したがつて、ヘーラクリートの「一切のものは流れる」といつた命題は、「意識だけは流れない」という命題で補われなければならない。意識の精神作用は「点作用」であり、それは時間的持ぞくも時間的間隔もないし、過去や未来からも限界づけられていない「絶対的現在」であり、「絶対的今」である。これに対して、流れるものには、限界点は存在しない。それはギリシヤ神話にいう混沌 Urchaos である。

人間は、この意識と生命を概念的に区別することによつて把握できるにもかかわらず、

流れる生命とそれを限界づける意識とが区別できなかったところに混乱の原因があつた。

いま生命と意識を区別すると、人間は、「生成」に対して「存在」であり、「自我」に対して「個人」である。それは変化するものと変化しないものとの対立を含んでいるものである。ボーデは、この対立の根源を探究しようとした。ニーチェが人間の歴史（精神の進歩）の根源力は、「無意識的生命力」であるとしていることに対して、かれによると「権力への意志」は、生命の特質というより、生命に対して戦うものの特質であり、人間の中心に対抗してはたらいっている力であるという。シラーも「人間は遊戯をするときにのみ全人である」(Der Mensch ist nur da ganz Mensch, wo er spielt) というが、これもまたニーチェと同じように人間の生成と存在の対立が、中心に向つてはたらいっている点を認識したにすぎないものであると批判する。そしてとくにシラーは、人間を理念に向つて進行する過程においてとらえているためにかえつて、人間を「絶対的純粋性」(absolute Reinheit) に閉じこめる結果になつているという。そして、ボーデは、人間から理念の幕をとりさり、永遠に変化する生命の姿に最高の価値を認めた。かれは、文化を生命現象とし、感覚、感情、幻想は流れる面に属しながら意識によつて文化となると考えた。この思考過程がかれの「形象の精神化」(die Entseelung des Bildes) と「精神の形象化」(die Entbildlichung der Seele) の思想の基礎をなしている。

しかしながら、ボーデの思考過程は、シラーを批判したとはいえ、シラーと根本的にちがつたものとは思われない。シラーもまた、その著「美と品位」の中で、「必然性の環」(Ring der Notwendigkeit) から、動植物にかぎらず、人間ものがれることはできないが、人間だけは、万物の霊長であるから、自然存在と分離できない必然性を意志によつて支配

することができる。そのために、人間は、意志行動において動植物とちがつた新しい系列を発見する」と述べている⁷⁾。これは、ボーデの精神の形象化と形象の精神化を内面からながめて、そこに真理の形態を発見したものであるといえよう。

ともあれ、ボーデは文化の根源である「あるもの」を流れるものとしてとらえた。

そして、身体運動を自然過程としてみることによつて、そこに自然現象としての律動過程を発見したのである。

III.

身体運動の自然過程の根源を律動に求めるように、生命的なものの全てを Urchaos の概念で説明するのは、ボーデも指摘したように、それが普遍的なもの、永遠なるもの、無限なるものであるといつても、やはり制限のないあるものの同一性を追求している点で論理中心の考えに陥っている。これを脱していくために、われわれはグレーセル (W. Graesser) の思想に着目する必要がある⁷⁾。かれも、文化の根源である生命の把握にはボーデと多くの点で共通しているが、しかし、かれは、ボーデのように身体運動からの探究でなく、体操、ダンス、~~ルビーク~~ ^{ルビーク} ~~を~~ ^を ~~鑑~~ ^鑑 ~~じて~~ ^{じて}、身体の意味を把握しようとして再び Chaos に着目し、そこに「新しいあるもの」(Das neue Etwas) を発見していつた。また当時のヨーロッパの合理主義、主知主義に対する反省を強い動機にしている点では、ボーデによく似ているが、ボーデが生命と意識の対立を課題としたのに対して、かれは古いものと新しいものとの対立を課題にしている点では決して同じではない。

グレーセルが生命に直観したものは「運動」(eine Bewegung) であり、「波」(eine Welle) であり、「流行」(eine Mode) であり、「激情」(eine ~~Passion~~ ^{Passion}) であり、「生命感情」(eine Lebensgefühl) であつた。この作用は

意識されるものでなく、水がしみこむように自己に入りこんでくるものであり、「無」(Nichts)から生じ、躍動しながら炎のように広がるはたらきである。これは現実に存在し、全ての人に満足を与え、活動を促し、新しいものを創造させている。この過程をかれは流転とも呼んでいる。

グレーゼルによると、この新しいものは、これまでの古い言葉では表現できないと考え、体育を意味する新しい言葉⁸⁾から、それを認識しようところみた。

そして、これまでに存在しなかつた、新しく体育を表現している言葉は、それぞれに特有の意味をもちながら、なお根底には、共通して「心身一致の存在」(leiblich-seelisches Einsein)が認められ、その根源には Chaos があつた。しかし、ここでの Chaos は、もはや前述したギリシヤのそれではなく、もつと東洋の思想⁹⁾に近いものになつているといえる。

グレーゼルが人間の本質的中核であり、有機的、感覚的行為のうちに躍動し、無から一切を創造する作用とみた Chaos には、わが国の芸道や武道が求めた本質に近いものがあるのを感じることができる。

グレーゼルは文化の根源に人間の本質を求めながら、それを心身の一致の存在であるとして、人間の内部にのみ発見していつた。そのために、かれは文化の外なるものを破壊し、外から人間を孤立させ、人間を die Menschen-Monaden として現実から抽象化してしまつている。これは、すでにわが国において、古い芸道や武道が批判されてきたと同じように批判されねばならない。現実の人間は、個人的、内面的存在だけでなくもつと社会的、文化的存在である。

IV

ここで、われわれは、文化社会の中で、文化の根源を探究するところに意義を認めて

いかなければならなくなつた。

ホイジンガ (Huizinga, J)^{10) 11)} は文化の根源を「遊戯」Spiel (スポーツも含む)の中で追求し、文化はすでに遊戯において存在することを認識した。そして、かれの著「遊戯する人間」の表題が示しているように、遊戯する人間に文化の根源を発見している。

遊戯は文化よりはるかに古く、動物の生活においてすでに存在し、文化は人間社会にいたつてはじめて存在する。したがつて遊戯の一般概念からすれば、動物も人間も同じであり、遊戯の根源は、すでに動物の遊戯においてみることができる。小犬の遊戯を観察すると、かれらは乱暴をしない。相手に対するさそいかけも丁寧である。格闘しても強く噛んだりしない。さらに重要な特徴は、全ての動作に「満足と悦び」を現わしていることである。これは動物の遊戯にみられる単一の特徴であるが、この高度に発達したものは人間の遊戯にも観察できる。大衆の賞讃のうちに競技し、美しい動作を示すことなどがそれである。

これによつてみると、遊戯とは生物学的現象や物理学的規定に対する精神的反応以上のものに考えられており、遊戯は意味ある作用であり、「生命保持のための直接的衝動」(der unmittelbaren orang nach Lebensbehauptung)を越えて生命活動に意味を与える「あるもの」をもっていることがわかる。この etwas は Geist といえ、いい過ぎになるし、Instinkt というだけではいい足りないような非物質的要因を含んでのものである。それなのに、これまでの多くの遊戯説は、この遊戯に十分な説明を与えていない。何れも説明が局部的であり、全体的把握をしてはいない¹²⁾。

これに対して、ホイジンガは、遊戯を全体的に把握するために新しく第二の問題を設定した。すなわち、「何が遊戯であり、いかに遊

戯が存在し、それは遊戯する人にとってどんな意義があるか」の問いに答えようとした。

かれのたどつた思考過程は、これまでの実験科学や生物学の方法がとつた考察や論理的解釈と同じではない。むしろ、これまでの方法に対しては否定的である。かれは直接経験する遊戯やスポーツの「面白さ」(Witz)や「熱狂」(Raserei)に着目し、「遊戯の面白さは何んであるか」「なぜ、大衆は競技に熱狂するのか」を明らかにしようとしている。理解するにあつてホイジンガは言葉を手がかりとし、Witzは、人間が遊戯するとき、これ以上にさかのぼることのできない、根源的なものを含んでいると考える。この根源的なものを、生命の統一概念のカテゴリーでいうならば、Ganzheitである、そして、この生命の全体性は、もはや動物や人間の世界を越えたところに存在するものである。

この生命の全体性の概念で説明できる etwas は、これまで使い慣らされてきた言葉や既存の文化形式からは説明できるものではないが、しかし、それは現実存在する。既成の抽象的概念は否定できても、人間が遊戯するという事実が存在するかぎりそれは否定できない。

遊戯を理性的に人間界に制限したり、自然的に動物界に制限したりして、一つの条件によつて規定された世界からみること、遊戯を全体的に把握した後になされてよいことであつて、それ以前に遊戯そのものを、相対的世界からでなく、宇宙における人間の位置の超論理的な性格から把握していることが重要なことである。

このようにホイジンガは、動物でも遊戯するときは「機械的なもの」(mechanische Dinge)以上のものであり、この点では、人間も動物と同様であるが、さらに人間は遊戯するときに単なる理性的存在以上の非論理的な存在であるとして、この人間存在を「遊戯す

る人間」(Homo Ludens)と呼んだ。そして文化の発生はこの Homo Ludens すなわち「遊戯的人間」(Spielend Mensch)の機能によつていふことを発見している。そして、かれはこの機能を、人間が生活を文化の中で表現していくときの社会的機能とみた。

ホイジンガの遊戯観はそのまま人間学であり、しかも社会的人間学である。かれは Homo Sapiens, Homo Faber, の哲学的人間学のなしたように、人間と動物の比較から人間の位置を明らかにしようとしたものでなく、むしろ、文化や社会の中で遊戯を通して人間の位置を把握しようとした。したがつてかれが Homo Ludens を文化の根源とみるかぎりあらゆる人間の行為は、遊戯をしているところに存在し、長い歴史の過程にあつて、人間の文化は、体育のそれをも含めて、一切が「遊戯の中で」(im Spiele), 「遊戯として」(als Spiel) 発展してきたものである。この思想は、われわれが、これまで、文化の根源を人間の内部における心身の統一作用に求めて来た態度を変化させることに成功している。

V

体育における文化の根源を探究するにあつて、わたくしは、最も原初的形態を、原始民族の生活における生命保全の衝動にみた。

しかし文化の進んだ人間生活では、生命保全への衝動は単なる生物学的要因ではなく人間の精神作用に結びついて、文化創造の原動力となつている。哲学的考察では、その根源に Chaos の概念を設定してきた。この生命的作用は、つねに対立を含みながら、身体運動の自然過程では律動を根源とし (R. Bode,) 身体の意味の創造には、心身一致の存在を根源に認識した (W. Gaeser)。体育における文化の根源を探るとき、これらの哲学的認識は、文化の根源を人間の内部にのみ探究していつた。そのために外なるものを破壊し、人間を孤立させ抽象させる結果となつた。ここにお

いて哲学的思索は人間学的探究にうつらなければならない。すなわち文化の根源を心身の統一原理に求めていたものは、宇宙における人間の位置を明らかにすることから再び追求しなおさなければならない必要が生じてくる。この必要に対して、ホイジンガーの *Homo Ludens* の思想は多くの示唆を与える。これによつて遊戯は文化的要素となり、その構造は社会的となる。そして遊戯の機能は、人間生活の早期から存在し、生命的な *etwas* を含み、人間の内部に対立するものに統一を与え、さらに、外には、美を主張し、詩を創造し、規則や集団をつくる、いわば文化の根源であることも理解できた。

現代の体育は文化的性格を要請する。この場合でも、結果として現われる体育の形式について、文化的であるかないかを判断する以前に、文化の根源について吟味を加え、その後で、現代の体育は、文化の根源がどれだけ回復されて来ているかを検討してみる必要がある。

次に、体育が文化の根源を人間学との関連において探究し、*Homo Ludens* に多くの示唆を得たとすれば、これからは、この *Homo Ludens* の考えに対して社会的人間学の立場からさらに検討してみなければならない。しかしここでは、この二つの問題の検討については新しい課題として残さなければならない。

註

- 1) *Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten*, 1926 の第1章。
K. Weule: *Ethnologie des Sports* では、歩走、攀登、跳躍、投擲、格技、球技、漕技、水泳、乗馬、武技、狩猟、釣りなど、全ての身体運動が生活様式と未分化に展開している。

- 2) Mitchell, A.M.: *The Theory of Organized Play*, 1927.
- 3) *Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten*, 1926. 第17章, R.H. Bartsch.: *Geschichte des Fischereisports*.
- 4) R. Bode: *Ausdrucksgymnastik*. (münchen, 1922).
- 5) R. Bode.: *Das Lebendige in der Leibesziehung*. (münchen, 1925).
- 6) クラーゲス著. 小立稔訳, 意識と生命, 畝傍書房, 昭和18.
- 7) W. Graeser: *Körperesinn: Gymnastik. Tanz. Sport*. 1927.
- 8) 当時, 体育に関係して多くの新しい言葉が使用されている。
Körperkultur, Gymnastik, Tanz, Kultttanz, Raumbtanz, Neue Körperlichkeit, Neue Körpergefühl, Körperpflege, Neues Turnen, Leibesübungen, Körperpflege, Nacktsport, Nacktkultur, Freikörperkultur, Funktionelles Turnen Bewegungsbildung.
- 9) W. Gaeser の *chaos* は, 古代支那, 殷の時代, 太玉 *Tao* の文化にまでさかのぼって渾沌の作用を考えている。
- 10) J. Huizinga, (独): *Homo Ludens: vom Ursprung der Kultur im Spiel*.
- 11) J. Huizinga, (英): *A study of the play-element in culture*, 1955.
- 12) Huizinga, J. はこれまでの遊戯説の説くところを次とする。
a. エネルギーの余剰発散, *Entladung überschüssiger Energie*.
b. 労働後の緊張解消, *Entspannung nach Kraftanstrengung*.
c. 生命促進の拡大, *Vorbereitung für Forderungen des Lebens*.
d. 実現できないものの補償, *Ausgleich für Nichtverwirklichtes*.

Eine Betrachtung über den Ursprung der ~~Kultur~~ in der Leibeserziehung

von

A. Asai ; Nara Mädchenhochschule

Bei den Naturvölkern handelt es sich um nur den instinktiven Trieb für die Erhaltung des körperlichen Lebens, wenn sie einst Sporte oder Spiele überhaupt treiben. In den Kulturmenschen ist demgegenüber diese Triebkraft doch mit einer geistigen, einer bewußtlichen und zweckvollen Handlung zusammengewirkt. Also muß man heute, um die Leibesübung des gegenwärtigen Menschens tief zu verstehen, über das Verhältnis des Lebenskraft zu dem Geistigen als der zwei fundamentalen Motive erforschen.

Unsere sinnbegreifende Wirkung, die als solche eine geistige ~~Aktion~~ ist, verwirklicht sich eben —wie ein Punkt— in einem Ort, wo es eigentlich weder die Zeitdauer gibt noch des zeitlichen Intervalls bedarf, das von solcher Aktion ausgefüllt werden müßte. Noch genauer; sie vollendet sich nur im überzeitlichen und zugleich gegenwärtigen Jetzt, das die strengste Grenz zwischen Vergangenheit und Zukunft bildet. Erst mit der Erfindung dieser Konzeption von absolutem Punkt der geistigen Gegenwart konnte sich der Mensch auch durch die Leibesübung über das biologische Wesen hinauf ausbilden lassen.

Die Lebenskraft ist aber im Grunde eine treibende und blinde Bewegung, wie fließender Strom. Ja, man kann sogar sie sei das kaum unterscheidbare Chaos des Lebens selbst, das für sich keine Gestalt bewußtlich formuliert aber daraus doch etwas ursprünglich Neues immer hergestellt werden könnte. Während die Leibeserziehung von heute die Auseinandersetzung dieser zwei Motive, der überzeitlichen Gegenwärtigkeit des Geistes und des ursprünglichen Chaos des Triebes, als die leiblich-seelische Einheit des Menschenseins innerlich zusammengefasst hat, so hat sie indessen den formlichen Ausdruck, den das jene auch dem diesen prägen sollte, vernichtend abstrahiert.

Der Begriff "Homo Ludens" verfolgt nun neulich in dem Spielen eine wesentliche Grundlage der Kultur. In dem Sinne, daß wir natürlich spielen wissen, haben wir eine außervernünftige Neigung. Aber durch das vernünftige Wissen zu treiben erfahren wir, vielleicht oft genießend, in uns auch etwas mehr als Rationales oder Zweckmäßiges, —also spielen wir hier wieder. Auf dieser Weise dürfen wir das echte, reine Spiel als der wesentliche Faktor in Kultur erkennen. So im allgemeinen hat die Kultur, einschließlich der Körperkultur, im Spiele ihren eigentlichen Ursprung.